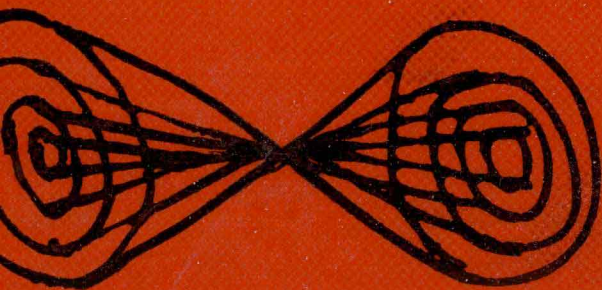


エウジ
リ
オル
ッ
トフス

世界文学大

57



ジ ヨ イ ス

若き日の芸術家の肖像

ウ ル フ

灯 台 へ

エ リ オ ッ ト

詩 評 論

海老池俊治・大澤實・深瀬基寛 他訳

世界文学大系

57

筑摩書房版

世界文学大系 57

ジ ョ イ ス
ウ ル フ
エ リ オ ッ ト

昭和35年10月15日発行

定価 450 円

訳者代表 海 老 池 俊 治

発 行 者 古 田 晁

印 刷 者 山 元 正 宜

発 行 所 株式 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の3
振替東京 165768 電話 (291) 局 7651

目次

ジョイス

若き日の芸術家の肖像

海老池俊治訳 5

ウルフ

灯台へ

大澤 實訳 133

エリオット

ブルーロックとその他の観察

深瀬基寛訳 249

詩集

深瀬基寛訳 261

荒地

深瀬基寛訳 272

うつろなる人々

深瀬基寛訳 285

聖灰水曜日

安田章一郎訳 288

伝統と個人の才能

深瀬基寛訳 295

ハムレット

吉田健一訳 302

形而上派の詩人たち

篠田一士訳 306

批評家の仕事

『ユリシーズ』、秩序、神話

ポール・ヴァレリーの的方法序説

アーヴィング・バビットのヒューマニズム

劇詩についての対話

ボオドレエル

D・H・ロレンスについて

宗教と文学

ミルトン

ジョイス、ウルフ、エリオット

解説 ジョイス

ウルフ

エリオット

年譜

吉田健一訳 314

丸谷才一訳 321

篠田一士訳 324

平井正穂訳 328

根村絢子訳 335

吉田健一訳 345

篠田一士訳 353

青木雄造訳 358

工藤好美訳 367

H・V・ラウ
大澤実訳 374

海老池俊治 387

大澤実 392

平井正穂 398

403

ジ
ョ
イ
ス

若き日の芸術家の肖像

カクテ知ラレザル工ニ心ヲ傾ク

オウイディウス『変形譚』八、一八¹

一

むかしむかしとても楽しいときだったが道を
こちらへモーモーがやって来たそして道をこち
らへやって来たそのモーモーがタック¹坊やと
いう名の可愛いちっちゃな子供に出会った……

父さんがその話をした。父さんは片目鏡から
彼を見た。顔に毛がはえていた。

彼がタック¹坊やだった。モーモーはベティ
ー・バーンが住んでいた道をやって来た。ベテ
ーはレモン糖を売っていた。

おお、野の薔薇^{ばら}が咲く
小さな緑の原に。

彼はその歌をうたった。それが彼の歌だった。

おお、緑のバヤがチャク。

寝床をぬらすと始め温かくそれから冷たくな
る。母さんが油紙をしいた。妙な匂いがした。
母さんは父さんよりもいい匂いがした。ピア
ノで舟乗りの角笛節をひいて踊らしてくれた。
彼は踊った。

トラララ ララ、

トラララ トラララディー、

トラララ ララ

トラララ ララ。

チャールズおじさんとダンテが拍手した。父
さんや母さんよりも年よりだったがチャールズ
おじさんはダンテよりも年よりだった。

ダンテは^{たす}箆^{へら}に二つブラシを持っていた。栗
色のビロード²の背をつけたブラシはマイケル・
ダヴィット³のため緑色のビロードの背をつけ
たブラシはバーネル⁴のためだった。薄紙を一枚
持つて行くといつもダンテは口中薬の粒をくれ
た。

ヴァンスのうちのものたちは七番地に住んで
いた。別の父さんと母さんがいた。アイリ
ンの父さんと母さんだ。ぼくが大きくなったらアイ
リ⁵ンと結婚するんだ。彼はティーブルの下に隠
れた。母さんがいった。

——いえ、ステイーヴンはごめんなさいって
いうでしょう。

ダンテがいった。

——ええ、でないと、鷺^{さぎ}が来て目玉をくり抜
きますよ。

目玉をくり抜く、

ごめんなさい、

目玉をくり抜く、

ごめんなさい、

目玉をくり抜く、

ごめんなさい、

目玉をくり抜く、

ごめんなさい、

*

広い運動場が生徒でいっぱいになっていた。
みんなが喚くと学監が大声で彼らを励ました。
夕方の空気は冷たく薄暗くフットボールの前進
に阻止がかけられて仲間がどしんとぶつかり
合うごとに汚れた皮の球が灰色の光のなかを重
い鳥のように飛んだ。彼は自分の組の端にくっ
ついていて。学監の目につかず、乱暴な足がと
どかぬところで、ときどき駆けるふりをしたの
(1) じつは、『変形譚』八、一八八行目の言葉。なお、以
下本文中の引用文もラテン語のものは片かなで記す。

(2) 一八四六—一九〇六、アイルランドの政治家。独立運
動のために働いた。

(3) チャールズ・ステュアート・バーネル、一八四六—九
一、アイルランドの政治家。自治運動の中心であったが、
一八九〇年情事のために失脚した。

だ。競技者たちの群のあいだで自分の身体が小さく弱々しい感じがして目が弱く涙がたまつた。ローディー・キカムはそうじゃない。第三組の主将になるだろうとみんながいう。

ローディー・キカムはちゃんとしたやつだ。きたなローチは鼻つまみだ。ローディー・キカムは自分の戸棚に脛当てを食堂に詰め籠むすを持っている。きたなローチは大きな手だ。金曜のプディングを「ケットかむりの犬」(ある種のプディング名)だといった。ある日こういつてきいたことがある。

——きみなんという名だい？

ステイヴンは答えた。ステイヴン・デイドラス。

するときたなローチがいった。

——そりやどんな名なんだ？

でステイヴンが返事をできないでいるとききたなローチはきいた。

——父さんはなにをしてるんだい？

ステイヴンは答えた。

——紳士だ。

するときたなローチはきいた。

——治安判事かい？

彼は組の端をあちこちのろろと動き、ときどきちょっと駆け足をした。が手はかじかんで青白かった。ベルトのついた灰色の服の脇ポケットに手を入れていた。それはポケットのまわりのベルトだ。がベルトといえは誰かをひっぱたくことにもなる。ある日誰かがキャンントウエ

ルにいった。

——ひとつばちんとやったらろか。

キャンントウエルは答えた。

——相手になる奴とやれよ。セシル・サンダーをひっぱたいてみな。見ものだな。きみなんぞ尻を蹴たおされるから。

あれはいい言葉じゃない。母さんが学寮で下品な子供と話をするなどといった。いい母さんだ。お城(昔の城が学校になつてゐるのである)の広間で最初の日さようならをいったとき母さんはヴェールを鼻までたくし上げてキスしてくれた。その鼻と目が赤くなっていた。が彼は母さんが泣きそうになつてゐるのを見ない顔をした。いい母さんだが泣くとそんなによくないのだ。父さんが小使銭に五シリング玉を二つくれた。うちへ手紙を書きたいことがあったら、何をしてもいいが、仲間の告げ口はするなと父さんがいった。それからお城の戸口で校長が父さんと母さんと握手した。法衣が風にはためいた。そして馬車が父さんと母さんを乗せて行つた。ふたりが馬車から叫んで、手を振つた。

——さようなら、ステイヴン、さようなら。

——さようなら、ステイヴン、さようなら。

スクラムの渦にまきこまれ、きらめく目と泥まみれの靴がこわくなって、脛のあいだを見とおそうと身をかがめた。一同はもがき呻きその足がこすり蹴りふみつけ合った。するとジャック・ロートンの黄色い靴がボールをはじり出して他の靴と足がみなそれを追いかけた。彼はし

ばらくそのあとを追つたが立ちどまつた。追いかけてもしかたがない。もうすぐみんな休暇にうちへ帰るのだ。晩飯がすんでから自習室へ行つて机の内側にはりつけた番号を七十七から七十六に変えよう。

寒い外にいるよりも自習室にいたほうがいいだろう。空は薄暗く冷たかつたがお城には灯。火がついてゐた。どの窓からハミルトン・ローアが垣根に帽子を投げたのだろうかそしてそのとき窓の下に花壇があつたのだろうか。ある日お城へ呼ばれたとき執事が戸の木についた兵隊の弾丸のあとを見せて教団が食べる軽焼きパンを一切れくれた。お城の灯。火が見えるのは氣持がよく温かい。本に出てくる話のようだ。きつとレスター・アペーはあんなだろう。そうだとコーンウェル博士の綴り字本にいい文章があつた。詩のようだったがただ綴りを覚えるための文章なのだ。

ウルジー、レスター・アペーに死し
院長そこに遺骸を葬る。

腫病いんびょうは植物のやまい、
癌腫がんしゅは動物のやまい。

暖炉の前の絨毯じゅうたんに寝ころがって、手に頭をのせ、そういう文章のことを考えたらいい氣持だろうな。彼は冷たいぬるぬるした水をじかに皮膚に感じて身ぶるいした。熱れて裂けたウェルズの栗を小さい嗅ぎタバコ入れと取りかえてや

らなかつたといつて「四角」の溝へおしこむとはウェルズは卑怯だ、四十も栗を手に入れていたのに。あの水はなんと冷たくぬるぬるしていたことだらう。大きな鼠が腐れ水のおぶくにとびこむのを誰か見たことがあった。母さんがダンテといつしよに炉端に坐つてブリジッドがお茶を持ってくるのを待っている。足を炉格子にかけているとそのきれいなスリッパがとても熱くなつてとても温かい匂いがする。ダンテはいろんなことを知っている。モザンビーク海峡（アフリカのモザンビークとマダガスカル島のあいだにある）がどこにあるかアメリカのいちばん長い川は何か月のいちばん高い山はなんという名か教えてくれた。アーナル神父は司祭だからダンテよりもっとものを知っているが父さんもチャールズおじさんもダンテは利口な女で学のある女だといった。でダンテが食事のあとであんな音をたてて口に手を当てたのは、あれは胸やけだ。

運動場の遠くのほうで叫び声がした。

——集まれ。

それから他の声が下の組と三組から叫んだ。

——集まれ、集まれ。

みんないっしょに集まつた。上気して泥まみれだ。彼は仲間に加わつた。やれやれ。ローデイー・キカムがボールの泥この組を掴んでいった。さあもう一つぽんとやれといったやつがある。がキカムはそいつに返事もせず歩いて行った。サイモン・ムーナンがやるなといったがそれは学監が見ていたからだ。そいつはサイモ

ン・ムーナンのほうを向いていった。

——なぜそんなことをいうのかみな知つてるよ。お前はマクグレイドのゴマスリだからな。

ゴマなんて妙な言葉だ。そいつがサイモン・ムーナンをそうだといつたのはいつもサイモン・ムーナンが学監の見かけ倒しの袖を背中から結んでやると学監は怒つたような顔をしたからだ。がいやだなあんな音は。いつかウィックロー・ホテルの手洗場で手を洗つたことがあるがあとで父さんが鎖を引いて栓をはずしたら汚い水が水受けの穴から流れ出した。すっかりゆっくり流れてしまふと水受けの穴がそんな音を立てた。ゴボ。ただもつと大きかった。

その音とまっ白な手洗場の様子を思い出して彼は身体が冷たくなりそれから熱くなった。二つ栓があつてそれをひねると水が出て来た。水と湯。彼は身体が冷たくなりそれからちよつと熱くなった。栓に印刷してある名前が見えた。まったくあれは妙なものだ。

廊下の空気がまたひやりとする。妙にしめつぱい。がすぐガスがつくだらうそして燃えながら小さな歌のような軽い音を立てる。いつも同じだ。遊戯室でみんなが話を止めるとそれが聞こえてくる。

算術の時間だった。アーナル神父が黒板にむずかしい問題を書いてそれからいった。

——さあ、誰が勝つかね。やれ、ヨーク。やれ、ランカスター。
ステイヴァンはできるだけやった。が問題が

むずかしすぎて頭がこんがらがった。上衣の胸にとめた白薔薇をかけた小さい絹の記章がはためき出した。算術は得意じゃなかった。がヨークが負けないようにできるだけやったのだ。アーナル神父は恐ろしい顔をしていたが、癪癪を起こしてはいなかった。笑っていた。そのときジャック・ロートンが指を鳴らすとアーナル神父がその練習帳を見ていった。

——よし。でかしたランカスター。赤薔薇の勝ちだ。こんどはそら、ヨーク。しっかりやるんだ。

ジャック・ロートンが向う側からこちらを見た。赤薔薇をかけた小さい絹の記章がくっきりりっぱに見えたがそれはロートンが青い舟乗り外套を着ていたからだ。ステイヴァンは自分の顔までまっ赤なのがわかった。初等級で誰が一番になるかと賭がはやつている。ジャック・ロートンが彼か。何週間かジャック・ロートンが一番のカードをもらひそれから何週間か彼が一番のカードをもらつたのだ。彼が次の問題にか

(1) 一七五一—一八三四、ロンドン生まれ。アイルランドの自由のためにつゝした。

(2) イングランド、レスターシャーの町レスターにあった修道院。そこでトマス・ウルジー（一四七五—一五三〇）、枢機官、政治家）が死んだ。

(3) 四角い建物という意味であるが、便所の隠語であらう。一二ページ以下参照。

(4) 源平勝負といったもの。薔薇戦争（一四五五—一八五）でランカスター家は赤薔薇が、ヨーク家は白薔薇が記章であつた。

かりアーナル神父の声が聞こえると白い絹の記章がはたはた揺れた。すると熱心さがすっかりさめて彼は顔がひやりとするのがわかった。そんなにひやりとしたのだから顔は青白いに違いないと彼は思った。問題の答えは出せないがかわまない。白薔薇と赤薔薇。考えてもきれいな色だ。一番と二番と三番のカードもきれいだ。ピンクとクリームとラヴェンダー。ラヴェンダーとクリームとピンクの薔薇は考えてもきれいだ。きつと野の薔薇はそういう色をしているのだらうと彼は小さな緑の原に野の薔薇が咲く歌を思い出した。が緑の薔薇というものはない。だが世界じゅうのどこかにきつとあるのだらう。鐘が鳴りそれから生徒たちは列をつくって教室を出ると廊下を通って食堂へ向った。彼は皿の二かたまりのバタを見たがしめったパンは食べる気がしなかった。テーブルクロスも湿ってぐんなりしていた。が彼は熱い薄い茶を飲んだ。白いエプロンを締めたぶきつちよな下働きが茶碗に注いでくれたのだ。下働きのエプロンも湿っているんじゃないかまた白いものはみな冷たく湿っているんじゃないか。きたなローチとソーリンはうちから送ってもらった罐詰のココアを飲んだ。茶なんぞ飲めやしない、豚の飲みものだ。というのだ。ふたりの父さんは治安判事だと、みんなの評判だ。

どの生徒もみなとても妙だ。みな父さんと母さんがあり違った着物と声をしている。彼はうちへ帰って母さんの膝に頭をのせたくなった。

がそれはできない。遊戯も自習もお祈りも終わりたいな。

もう一杯熱い茶を飲むとフレミングがいった。

——どうしたんだ？ どこか痛いのかいどうしたんだい？

——わからない、とステイヴンはいった。

——お腹がおかしいのかい、とフレミングがいった。顔が青いよ。だがなおるだらう。

——うん、とステイヴンはいった。

がそこがおかしいのじゃない。もし胸がおかしいなんてことがあるものなら胸がおかしいのだ。フレミングはいいやつだ。様子をきいてくれた。彼は泣きたくなった。テーブルに肘をもたせて耳たぶを閉めそして開けた。すると耳たぶを開けるとに食堂の音が聞こえた。夜の汽車のようにどよめいた。耳たぶを閉じるとどよめきはトンネルに入る汽車のように閉め出された。あの晩ドールキー(ダブリン近郊の海)で汽車がそういうふうにとよめいて、それからトンネルに入ると、それが止んだ。目を閉じると汽車が走った。どよめきそれから止んだ。またどよめき、止んだ。それがどよめき止みそれからまたトンネルからどよめき出てそして止むのを聞くのはいい気持だ。

すると上の組の連中が食堂のまん中の敷物を通って出て行き出した。パディー・ラスとジミー・マギーとシガーをのむことを許されているスペイン人と毛の帽子をかむった小さいポルトガル人だ。それから下の組の食卓仲間と三組の

食卓仲間。だれもかれも違った歩き方をする。

遊戯室の隅に坐ってドミノを見守るふりをすると一度か二度ちよつとのあいだガスの小さな歌が聞こえた。学監が生徒たちといっしょに戸口にいたがサイモン・ムーナンがその見かけ倒しの袖を結んでいた。学監はみんなにタラベツグの話をしていた。

それからステイヴンが戸口から離れるとウエルズが近づいて来ていった。

——おい、デューダラス、きみ寝る前に母さんにキスするかい？

ステイヴンは答えた。

——うん。

ウエルズは他の仲間を振り向いていった。

——こいつ、毎晩寝る前に母さんにキスするっていつてるよ。

他の仲間は遊戯を止めて向きなおった。笑っていた。ステイヴンはその目を受けて赤くなりいった。

——いいや。

ウエルズがいった。

——こいつ、寝る前に母さんにキスしないっていつてるよ。

みんなまた笑った。ステイヴンはいっしょに笑おうとした。たちまち身体が熱くなつてどぎまぎした。あの問いの正しい答えはどうなんだらうか。二つ返事をしたのにウエルズは笑った。がウエルズは文法の三年級だから正しい答えを知っているに違いない。彼はウエルズの母

さんのことを考えようとしたがウエルズの顔に目を上げる勇気がなかった。ウエルズの顔は嫌いなのだ。熱れて裂けたウエルズの栗を小さい嗅ぎタバコ入れと取りかえなかったからといって前の目に「四角」の溝に押しこんだのはウエルズなのだ、四十も栗を手に入れていたのに。卑怯だあんなことをするのは。みんなそういう。あの水はなんと冷たくぬるぬるしていたことだろう。あの腐れ水のあぶくへ大きな風がぼちゃんととびこむのを誰か見たことがある。

溝泥の冷たいぬめりがすっかり身体を蔽った。自習の鐘が鳴って組のものが遊戯室から並んで出ると、彼は着物の内側に廊下と階段の冷たい空気を感じた。まだ何が正しい答えなのか考えようとした。母さんにキスするのは正しいのかそれとも母さんにキスするのは間違いなのか。どういう意味だろう、キスするとは？ ああいうふうに顔を上げておやすみというと母さんが顔を下げる。それがキスすることだ。母さんが唇をこちらの頬に当てる。その唇は柔かく頬をぬらす。そしてちっちゃな音を立てる。キス。なぜひとは二つの顔であんなことをするのだろう。

自習室に坐って彼は机の蓋を開け内側にはりつけた番号を七十七から七十六に変えた。がクリスマス休暇はまだずっと先だ。がいつかは休暇が来るだろう地球はいつでも廻っているのだから。

地理の本の第一ページに地球の絵がある。雲

のまん中にある大きな球だ。フレミングはクレオンを一箱持っていていつかの晩自習のとき地球を緑に雲を栗色に塗った。ダンテの筆筒にある二つのブラシのようだ。緑色のビロードの背をつけたバーネルのブラシと栗色のビロードの背をつけたマイケル・ダヴィットのブラシだ。がそういう色に塗ってくれとフレミングにいったのじゃない。フレミングが自分でそうしたのだ。

彼は学課を勉強しようと地理の本を開けたが、アメリカの地名を覚えることができなかった。がそれでも違った名がついているのはみな違った場所だ。みな違った国にあり国は大陸にあり大陸は世界にあり世界は宇宙にある。

彼は地理の本の見返しを開けてそこに以前書いた字を読んだ。自分のこと、名と居場所だ。

ステイヴン・デューダラス
初等級

クロンゴーズ・ウッド学寮
サリンズ(実際キルデア県にある町、
ダブリン西南約二十マイル)
キルデア県

アイルランド
ヨーロッパ

世界
宇宙

それは自分の手で書いたのだ。がフレミングがいつかの晩ふざけて反対のページに書いたの

は、

ステイヴン・デューダラスはわが名、
アイルランドはわが国。

クロンゴーズはわが住まい、
天国はわが願いなり。

彼はその行を逆に読んだが詩ではなかった。でそれから見返しを下から上へ自分の名まで読んだ。それが自分なのだ。もう一度上から下へ

そのページを読んだ。宇宙のあとに何があるのだろうか。無だ。が宇宙のまわりには無の場所が始まる前にどこでそれが行き止まるかを示すものが何かあるのだろうか。塀の筈はない。があらゆるもののまわりにぐるりと細い細い線があるのかもしれない。あらゆるものとあらゆる場所のことを考えるのは大した話だ。神だけがそうすることが出来る。彼はそれがどんなに大した考えに違いないかを考えようとした。が考えることができたのはただ神のことだけだった。神が神の名なのはちょうど彼の名がステイヴンなのと同じなのだ。「デュー」というのが神のフランス語でそれも神の名だ。で誰かが神に祈って「デュー」というと神はすぐ祈っているのがフランス人だとわかってくださる。だが、世界じゅうの違った言葉にみんな違った神の名があり神は祈る人々が違った言葉でいうことをみな聞き分けてわかってくださるが、それでも神はいつでも同じ神で神の本当の名は神なのだ。

そういうふうを考えるのはまったくくたびれる。まったく頭が大きくなるような気がする。彼は見返しのページをくってぼんやり栗色の雲のまん中にある緑色の丸い地球を見た。緑色に味方するのは栗色に味方するのと、どちらが正しいのだろうか。ある日ダンテがバーネルのブラシから緑色のビロードの背を鉄で切り取ってバーネルは悪い男だといった。いまうちでそのことを議論しているだろうか。それが政治というものだ。二つ立場があつて、ダンテはその一つの父さんとケイシーさんは反対の立場だが母さんとチャールズおじさんはどちらの立場でもない。新聞に毎日そのことが何か出ている。

政治とはどういう意味がよくわからずどこで宇宙が終わるのかわからないのはつらいことだ。彼は小さく弱い気がした。いつ詩と修辭を習う連中のようになるだろうか。あの連中は大きな声をして大きな靴をはきそして三角を勉強する。それはずっと遠い先のことだ。最初に来るのは休暇でそれから次の学期でそれからまた休暇でそれからもう一つ学期でそれからまた休暇トネルに入らうたり出たりする汽車のようだがあれは耳たぶを開けたり閉じたりしたときに聞こえる食堂で食べている生徒の音のようだ。学期、休暇。トネル、出る。音、止む。なんと遠い先だろう。寢床へ入って眠つたほうがいい。ただ礼拝堂でお祈りそしてそれから寢床。彼は身ぶるいて欠伸をした。シーツがちよつと熱くなつてからの寢床は気持ちいいだろう。最初

シーツに入るのはとても冷たい。最初どんなに冷たいか考えて彼は身ぶるいした。がやがて熱くなつて眠れるようになる。疲れるのはいい気持だ。彼はまた欠伸をした。夜のお祈りそして寢床。彼は身ぶるいして欠伸をしたと思つた。二、三分したら気持ちよくなるだろう。彼は冷たいぞくぞくするシーツから温かいぬくもりがはいあがつてくるのを感じた。温かく温かくどこもかもすっかり温まる。とても温かいがそれでも彼は少し身ぶるいをしてなお欠伸をしたと思つた。

夜の祈りの鐘が鳴ると彼はみんなのあとから自習室を出て階段を下り廊下を通つて礼拝堂に向つた。廊下の灯火は暗く礼拝堂の灯火も暗かつた。まもなくすっかり暗くなり眠つてしまふだろう。礼拝堂には冷たい夜の空気が立ちこめて大理石の彫像は夜の海の色をしていた。父さんの家のそばにある護岸の下は冷たく暗い。がボンスをつくるために薬罐が炉の台にかけられるだろう。

礼拝堂の学監が彼の頭の上で祈つたが彼の記憶は応唱を知つていた。

主よ、われらの唇を開きたまえ
われらの口おんみの賛美を唱えん。
われらに御手を差しおのべたまえ、神よ、
主よ、いそぎわれらを助けたまえ。

礼拝堂に冷たい夜の匂いが立ちこめていた。

が聖い匂いだ。日曜のミサに礼拝堂のうしろにひざまずく年よりの百姓の匂いのようにやない。あれは空気と雨と泥炭とコール天の匂いだ。があのひとたちはたいそう信心深い百姓なのだ。彼のうしろから首に息を吐きかけて祈りながら溜息をつく。クレインに住んでいるということだ。そこに小さい小舎があつて馬車がサリンズから通りがかったとき女が腕に子供を抱いて小舎の潜り戸のところ立っているのを見たことがある。一晩あの小舎の煙る泥炭の炉の前に、炉の光しくない暗闇に、温かい闇に、百姓の匂いを、そうだ空気と雨と泥炭とコール天の匂いを吸いながら眠つたら気持ちいいだろうな。だが、あの木の間道の暗いことといつたら。暗闇に迷子になるだろう。どんなふうにかを考える

と彼は怖ろしくなつた。
礼拝堂の学監の声が最後の祈りを唱えるのが聞こえた。彼はいっしょに外の木蔭の闇に向つて祈りを捧げた。

主よ、願わくは、この住みかをみそなわしたまいて敵の畏をこごとく打ち除けたまえ。聖なる御使いがここに宿りてわれらを平和のうちにお守りおんみの祝福が常にわれらの上にあらんことを主キリストによりて。アーメン。

寢室で着物を脱ぐとき指がふるえた。彼は指に急げといつた。ガスが弱まる前に着物を脱いでそれからひざまずき自分のお祈りをして寢床

に入らなければならぬのだ、死んでから地獄へ行かないように。彼は靴下を巻き取り手早く寝間着を着て寝台の脇にふるえながらひざまずき素早くお祈りをくり返した。ガスが消えるだろうと心配だった。こうぶつとつとつばやきながら肩がふるえているのを感じた。

神様父さんと母さんに恵みを垂れわたくしのためにふたりをお助けください。

神様小さい弟と妹に恵みを垂れわたくしのためにみんなをお助けください。

神様ダンテとチャールズおじさんに恵みを垂れわたくしのためにふたりをお助けください。

彼は十字を切つて素早く寝床に上がり、寝間着の端を足の下へたくしこんで、冷たい白いシーツの下で丸くなった。ぶるぶるふるえながらこれで死んでから地獄へ行かなくてすむだろう。ふるえが止むだろう。寝室の生徒たちにおやすみをいう声があった。彼はちよつとのあいだ上掛けごしにのぞいてみたが寝台のまわりと前に黄色いカーテンが見えどこもすっかり閉め込まれていた。灯火が静かに弱まった。

学監の靴足が遠のいた。どこへ？ 階段を下りて廊下の向うへかそれとも端にある自分の部屋へか。暗闇が見えた。夜そのへんを歩く馬車の灯のような大きな目をした黒犬の話は本当だろうか。人殺しの幽霊だということだ。恐れ

身ぶるいがいつまでも彼の身体を走った。お城の暗い入口の広間が見えた。古い衣裳をつけた年よった召使が階段の上のアイロン室にいる。ずつと昔のことだ。年よった召使はおだやかだ。火が燃されているが、それでも広間は暗い。広間から人の姿が階段を上ってくる。元帥の白いマントを着ている。顔が青白く変だ。脇腹に手を押しつけている。変な目つきで年よった召使を見る。召使が見返すと主人の顔とマントが見えて致命傷を受けていることがわかる。が見わたすところただ暗闇なのだ。ただ暗い静かな空気なのだ。主人は海のはるか向うにあるブラーグの戦争で致命傷を受けたのだ。戦場に立っている。手を脇腹に押しつけている。顔が青白く変で元帥の白いマントを着ている。

そういうことを考えるとなんと冷たく変なのだろう。暗闇はみな冷たくて変だ。あたりに青白い変な顔がある。馬車の灯のような大きい目人殺しの幽霊と、海のはるか向うの戦場で致命傷を受けた元帥の姿だ。あんな変な顔をして何をいいたいのだろう。

主よ、願わくは、この住みかを見そなわし
たまいてことごとく打ち除けたまえ……

休暇にうちへ帰ること。気持がいいだろうな。みんなそうだった。冬の朝早くお城の戸の外で馬車に乗りこむ。馬車が砂利道を走って行く。校長先生万歳。

ばんざい、ばんざい、ばんざい。

馬車が礼拝堂を通りすぎるとみんな帽子を脱ぐ。田舎道を楽しく走る。馭者が鞭でボーデンズタウンを指す。一同が万歳を叫ぶ。あの陽気な農夫の家を通りこす。万歳万歳そしてまた万歳。クレインをすぎて、万歳を叫び万歳を受ける。百姓の女が潜り戸のところに立ち、男はあちこちに立っている。冬の空気はいい匂いがする。クレインの匂い。雨と冬の空気といぶる泥炭とコール天。

汽車は仲間ていっばいだ。長い長いチョコレート色の汽車にクリーム色の仕上げ板が張ってある。車掌が行ったり来たりして、戸を開け、閉め、錠をかけ、はずす。濃い青に銀糸のまじった出で立ちの男だ。銀色の笛を持っていて鍵がいそがしい音楽を奏でる。クリック、クリック。クリック、クリック。

汽車は平たい土地を駆けてアレンの岡を越す。電柱が飛び去る、飛び去る。汽車はどんどん走る。汽車は知っているのだ。父さんの家の玄関にカンテラがあり緑色の木の枝がねじ合わしてある。壁鏡のまわりに柎と葛がかかり、緑と赤の柎と葛がシャンデリアのまわりにかかっている。壁の古い肖像画のまわりに赤い柎と緑の葛がある。彼のためのそしてクリスマスのための柎と葛だ。

気持がいい……

うちのものがみんな。おかえり、ステイヴン。歓迎の物音。母さんがキスしてくれる。そ

れでいいのだろうか？ 父さんは元帥だ。治安
判事よりもえらいのだ。おかえり、ステイーヴ
ン。

音がする……

カーテンの輪が棒をすべて閉まる音、ばし
やばしやという洗面器の水の音がする。寝室で起
き着物を着て顔を洗う音がする。学監があちこ
ち歩いて生徒に急げといいながら手を叩く音が
する。青白い日の光が引かれた黄色いカーテン
と乱れた寝台を示した。彼の寝床はとても熱く
顔と身体がとても熱かった。

彼は起きあがって寝台の脇に坐った。弱って
いた。靴下をはこうとした。おそろしくごわご
わした感じがした。日の光が妙に冷たかった。
フレミングがいった。

——加減が悪いのかい？

わからない。するとフレミングがいった。

——寝床へお戻りよ。加減が悪いんだとマク
グレイドにいつとくよ。

——病気なんだ。

——誰が？

——マクグレイドにいわなくっちゃ。

——寝床へお戻りよ。

——病気なのかい？

彼が足にこびりついた靴下を解き放して熱い
寝台へあがるあいだ誰かが腕をかかえてくれた。

彼はシーツのあいだにちこまった。生ぬる
いぬくもりがあった。仲間のものたちが
ミサに出る着物を着ながら彼のことを話して

いるのが聞こえた。「四角」の溝に押しこむな
んて、卑怯なことをするやつだ、といっていた。
それから声が止んで、みな行ってしまった。

寝台のそばに誰かの声がした。

——デューダラス、ばらしやしないだろうね
きつと。

ウエルズの顔があった。それを見るとウエル
ズが心配しているのがわかった。

——あんなつもりじゃなかったんだ。きつと
ばらさないね？

どんなことをしても、仲間の告げ口はするな
と父さんがいった。彼は頭を振りしなないと答え
てよかったと思った。

ウエルズはいった。

——あんなつもりじゃなかったんだ。ぜった
いだ。ふざけただけなんだから。すまない。

顔と声は行ってしまった。心配だからすまな
いのだ。何かやまいかと心配なのだ。腫病は植
物のやまいで、がんい腫病は動物のやまい。それとも逆
だったのかしら。あれはずっと以前のことだっ
た、運動場で夕暮の光を浴びながら、組の端を

あちこちのろろ歩いていたのは、重い鳥が灰
色の光のなかを低く飛んだ。レスター・アペー
に灯火がついた。ウルジーがそこで死んだ。院
長が手ずから遺骸を葬った。

ウエルズの顔じゃなかった。学監の顔だった。

仮病じゃない。いや、いや。本当に病気なのだ。

仮病じゃない。彼は顔に学監の手を感じた。冷
たい湿っぽい学監の手の下で、顔が温かく湿っ

ぽいを感じた。その手は鼠に触ったような感
じだ。ぬるぬるして湿っぽく冷たい。どんな鼠
も二つ目があってそれで見える。すべていぬる
ぬるした毛皮、跳とぼうとちぢめた小さい小さい
足、ものを見る黒いぬるぬるした目。鼠には跳
び方がわかつている。が鼠の頭では三角はわか
らない。死ぬと横倒しになる。すると毛皮が
わく。ただの死骸なのだ。

学監がまたやって来て起きるようになって
のはその声だった。起き着物を着て病室へ行く
ようにと副校長がいったという。できるだけ手

早く彼が着物を着ているあいだに学監はいった。

——腹痛にとつつかれたんだからマイケル修
士のところへ宿下りをしなければならんだ。

そういつてくれたのはたいそう親切だったの
だ。まったく彼を笑わせるためなのだ。が彼は

頬も唇もすっかりぶるぶるして笑うことができ
なかった。学監はひとりで笑わなければならな
かった。

学監は叫んだ。

——速歩行進。ヘダリあし、メギあし。

ふたりはいっしょに階段を下り廊下を通って
浴室のそばをすぎた。その戸を通りすぎるとき

彼はぼんやり恐れを抱きながら、ぬるい泥炭色
の溜り水と、ぬるいじめじめした空気と、とび

こむ音と、葉のようなタオルの匂いを思い出し
た。

マイケル修士は病室の戸口に立っていたがそ
の右側の暗い戸棚の戸から葉のような匂いがし

た。糊の瓶の匂いだ。学監がマイケル修士に話をするとマイケル修士は返事をして「はい」といった。白髪混りの赤らんだ髪の妙な顔つきだ。あのひとがいつまでも修士なのは妙だ。が「修士」でひとと違つたふうをしているからといって誰もあのひとにうやうやしく「はい」といえないのも妙だ。信心深くないからだろうかでないかなぜはかのひとに追いつけないのだろうか。

室に二つ寝台があつてその一つに誰か寝ていた。ふたりが入るとその男が叫んだ。

——やあ、デイーダラスだな。どうした？

——どうってこともない空模様だな、とマイケル修士がいった。

文法三年級の生徒だったが、ステイヴンが着物を脱いでいるあいだに、バターストを一切れくれとマイケル修士に頼んだ。

——お願いだ、と彼はいった。

——バタバタしなさんな、とマイケル修士はいった。医者が来たら朝のうちに退院の扱いだから。

——ぼくが？ とその生徒はいった。まだ加減が悪いのに。

マイケル修士はくり返した。

——退院の扱いだ。うそじゃないよ。

修士は身をかがめて火をかき立てた。鉄道馬車の馬の長い背のように長い背をしていた。真面目くさつて火かき棒を振り文法三年級の生徒にうなずいた。

それからマイケル修士は行つてしまいそしてしばらくすると文法三年級の生徒は壁のほうを向いて眠りこんだ。

病室だ。彼は病氣になったのだ。うちの母さんと父さんに手紙で知らせてくれただろうか。が誰か司祭が行つて話したほうが早いだろう。いや司祭に持つて行つてもらう手紙を書こう。

母さん

ぼくは病氣です。うちへ帰りたいのです。どうかつれ戻しに来てください。病室にいます。

さようなら、

ステイヴン

うちのものたちはなんと遠いところにいることだろう。窓の外に冷たい日の光が差している。死ぬのじゃないだろうか。日の差した日にでも死ぬかもしれない。母さんが来ない前に死ぬかもしれない。そしたら「ちび」が死んだときにそうしたとみんながいったように礼拝堂で死者のミサを受けるだろう。仲間のものがみなミサに出るだろう。黒い着物を着て、みな悲しい顔をして。ウエルズも出るだろうが誰もそちらを見ないだろう。校長が金糸の混つた黒いコープを着て出て祭壇の上と棺台の周りに高い黄色のろうそくが並ぶだろう。みんなが礼拝堂からゆつくり棺を担ぎ出し彼は科並木の大通りのはずれにある教団の小さな墓地に葬られるだろう。

するとウエルズは自分のしたことをすまないと思つた。鐘がゆつくり鳴るだろう。

鐘の音が聞こえた。彼はブリジッドが教えてくれた歌をひとりでおずさんだ。

ディンドン、お城の鐘だ。

さようなら、お母さん。

古い墓場に埋めとくれ

いつとう上の兄さんのそば。

ぼくのお棺は黒い色、

天使が六人うしろに立つて、

二人は歌い二人は祈り

二人は運ぶぼくの魂。

なんとそれはきれいで悲しいんだろう。「古い墓場に埋めとくれ」というところはなんときれいな歌詞なんだろう。彼の身体をおののきを通りすぎた。なんと悲しくなるときれいなんだろう。彼は静かに泣きなくなったがそれは自分のためではなかった。そんなにきれいで悲しい、音楽のような歌詞のためだった。鐘、鐘。さようなら、おさようなら。

冷たい日の光が弱まりマイケル修士が彼の寝台のそばにビーフティーの碗を持つて立つていた。口が熱くかわいていたからありがたかった。運動場で運動している音が聞こえた。そして学寮では彼がいるのと変わらずに日程が進んで行った。

それからマイケル修士が出て行くことになる

と文法三年級の生徒はきつと帰って来て新聞のニュースをすっかり教えてくれと頼んだ。彼はステイヴンにいった、自分の名はアサイで父さんはとびきり上等の競馬馬をたくさん持っているがマイケル修士がほしいときにいつでも十分チップをやるのはマイケル修士がたいそうよくしてくれてお城で毎日取っている新聞からいつもニュースを教えてくれるからだ。新聞にはあらゆる種類のニュースが出ている。事故、難船、スポーツ、政治。

——このごろは新聞に政治のことばかり出ている、と彼はいった。きみのうちのひととそその話をするかい？

——うん、とステイヴンはいった。

——ぼくのうちでもだ、と彼はいった。

——それからちよつとのあいだ考えていった。

——きみ妙な名だね、デイダラス。ぼくも妙な名だけれど、アサイなんて。ぼくの名は町の名なんだ。きみの名はラテン語みたいだね。それからきいた。

——きみ謎解きがうまいかい？

——ステイヴンは答えた。

——そんなにうまくない。

——すると彼はいった。

——この謎の答えがわかるかい？ なぜキル

デア県は半ズボンの足のようか？

ステイヴンはどんな答えだろうかと考えて

そしていった。

——わからない。

——そのなかに股があるからだ、と彼はいった。冗談がわかるかい？ アサイはキルデア県にある町だが、股はもういっぽうのサイだろう。

——ああ、そうか、とステイヴンはいった。

——古い謎なんだよ、と彼はいった。

——ちよつとしてから彼がいった。

——ねきみ。

——なんだい？ とステイヴンはきいた。

——あのね、と彼はいった。あの謎はもう一つかけ方があるんだ。

——そうかい？ とステイヴンはいった。

——同じ謎なんだ、と彼はいった。そのもう一つのかけ方を知っているかい？

——いいや、とステイヴンはいった。

——そのもう一つを考えつかない？ と彼は

いった。

彼はそういういながら夜具ごしにステイヴンを見た。それからまた枕に身を返していった。

——もう一つあるんだがどんなだか教えてやらないよ。

——なぜ教えてくれないのだろう。競馬馬を持っ

ている彼の父さんもソーリンの父さんやきたな

ローチの父さんのように治安判事に違いない。

ステイヴンは自分の父さんのことを考えた。

母さんが楽器をひくと歌を歌い六ペンスほしい

といういつも一シリングくれることをすると

他の生徒の父さんのように治安判事でないのが

気の毒になった。ではなぜ自分はこんなところ

へやられて連中といっしょにいるのだろうか。

が父さんはいった、ここへ来たらまんざら他人じゃないだろう大おじさんが五十年前にここで解放者に式辞をささげたからと。その時代の人々は古めかしい衣裳で見分がつく。おごそかな時代のような。でその時代のことじゃないのだろうか、クロンゴーズの生徒が真鍮のボタンのついた青い上衣と黄色いチョッキを着て兎の皮の帽子をかむり大人のようにビールを飲み野兎を追いかける自分の猟犬を飼っていたのは？

窓を見ると昼間の光が弱まっていた。運動場にくもった灰色の光が当たっているだろう。運動場には音がしなかった。教室ではみな作文を書いているに違いない、いやたぶんアーナル神父が本を読んで聞かしているだろう。

薬をくれないのは妙だ。がたぶんマイケル修士が戻ってくるとき持ってくるのだろう。病室に入るとひどいものを飲ませるとみながいった。がだいい気分がよくなった。ゆっくりよくなるのは気がいいだろう。そしたら本を貸してもら

える。図書室にオランダの本がある。そのなかに感じのいい外国の名と不思議な恰好の町や舟の絵がある。それを見るととても楽しくなる。窓のところの光はなんと青白いのだろう。がそれはいい気持だ。火影が壁に立ちそして引いた。波のようだ。誰かが石炭をくべたのだが声が聞こえる。話している。波の音だ。いや波が

立ち引きながら仲間同士で話しているのだ。波立った海が見える。立ち引く長い暗い波、